

宮崎県総合博物館研究紀要、第25輯、17-25、2004年3月

## キリタチヤマザクラの分布と形態

Distribution and morphological characteristics of *Cerasus sargentii* (Rehder)  
II.Ohba var. *akimotoi* II.Ohba & Mas.Saito

齊藤政美  
秋本治

---

## キリタチヤマザクラの分布と形態

齊藤政美<sup>1</sup>・秋本 治<sup>2</sup>

<sup>1</sup>宮崎県総合博物館

<sup>2</sup>宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町大字鞍岡4499-1

Distribution and morphological characteristics of *Cerasus sargentii* (Rehder)

I.I.Ohba var. *akimotoi* I.I.Ohba & Mas.Saito

Masami SAITO<sup>1)</sup> and Hajime AKIMOTO<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Miyazaki Prefectural Museum of Nature and History

<sup>2)</sup> 4499-1,Kuraoka, Gokase Town, Nisiusuki County, Miyazaki

**Abstract:** We studied about the number, distribution and morphological character of *Cerasus sargentii* var. *akimotoi* in the Shiraiwa Mountain Group ranging from Gokase Town to Shiiba Village in Miyazaki prefecture. More than 100 trees grow in the Shiraiwa Mountain Group occurring frequently on the calcareous slopes below the rocky hill of Mt. Shiraiwa-yama. In addition, two trees were found at Mt.Dou-dake. *Cerasus sargentii* var. *akimotoi* differs from *Cerasus sargentii* in morphology of flowers and leaves, and from *Cerasus sargentii* in length of the pedicels, morphology of the calyx, the lobes and the petals. We think that *Cerasus sargentii* growing in highland areas in the western parts of Japan is a relic plant and *Cerasus sargentii* var. *akimotoi* is also a relic plant that was left behind and had evolved independently in the Shiraiwa Mountain Group and at Mt.Dou-dake.

**Key words:** *Cerasus sargentii*, limestone, relic plant

### 1 はじめに

秋本は白岩山の岩峰下にピンクの花をつける山桜があることに気づいていた。白岩山は石灰岩の山で、その桜が生えている場所はガレ場となっていて、人も近づかない所である。1999年5月、秋木はそこで行き、花を観察したところ、周辺にあるヤマザクラやエドヒガンとはやはり異なると感じた。連絡を受けた齊藤が現地で調査し検討した結果、九州では記録のないオオヤマザクラと判断したが、花柄の長さが図鑑の記載と異なることから、新変種の可能性もあるとして、標本を採取することにした。現地は、九州中央山地国定公園の特別保護区であるため環境省の許可を、また、国有林で九州中央山地森林生物遺伝資源保存林にも指定されていることから林野庁の許可をとった。採取した標本は、サクラに詳しい東京大学総合研究博物館の大場秀章教授に送付した。その結果、大場教授は、オオヤマザクラの変異に含まれることは明らかであるが、花柄が長いなど他地域のオオヤマザクラとは異なる特徴をもつとして、新変種キリタチヤマザクラと名付けた。(2000)。

筆者らは、キリタチヤマザクラの個体数や分布状況、形態的特徴について調査を行ったので、ここに報告する。

## 2 オオヤマザクラについて

ヤマザクラが南日本に多く分布するのに対し、オオヤマザクラは概ね北日本に分布している。全体的な姿はヤマザクラに似ていて、開花時に葉が展開を始める点も同じである。しかし、花は大きく、ピンク色で美しい。主な生育地は、本州の中部地方、関東地方から東北地方、北海道で、エゾヤマザクラの別名もある。南日本にもわずかではあるが、点在している。兵庫県では、温泉町霧ヶ瀧、美方町小代渓谷、美方町備～小代越、丹波宮町・大屋町氷ノ山。岡山県では、上斎原村、広島県の比婆山、戸河内町深入山、神之瀬峡、高野町神之瀬湖。山口県では、羅漢山、錦岳、寂地山。四国では、愛媛県の石鎚山、徳島県の東祖谷山村に生えている。しかし、いずれの県でもその数は少なく、絶滅危惧種となっている。

## 3 キリタチヤマザクラの自生地

キリタチヤマザクラが見つかったのは、宮崎県五ヶ瀬町と椎葉村、それに熊本県の境にある向坂山(1684m)から白岩山(1646m)にかけての脊梁山地のごく狭い地域である(図1)。この地域は九州中央山地国定公園の特別保護地区や保護地域として指定されている。また、白岩山は、名前のとおり石灰岩が露出している山で、岩峰の岩棚には、ウスユキソウ、ヤハズハハコ、キリンソウ、イワギク、イチョウシダなどの希少な植物が多く見られ、県の天然記念物に指定されている。

この一帯はブナやミズナラ、シナノキなどを優占種とする落葉広葉樹林であるが、石灰岩峰やガレ場があるため、植生はかなり不安定なところが多く、そのような所にこのキリタチヤマザクラはよく生えている。

キリタチヤマザクラが新変種として発表され、新聞等で紹介された後、筆者(齊藤)のもとに1枚のサクラの写真が寄せられた。それは、宮崎県日之影町の洞岳(1220m)で撮られたもので、花の枝の写真であったが、花柄が長いなどキリタチヤマザクラの特徴を持っていた。洞岳は、白岩山と同じく石灰岩峰をもつ山で、石灰岩地特有の植物が生えている。2003年4月28日、現地調査を行った結果、情報のあった個体は岩峰の北側のガレ場にあり、倒れており、花びらはすでに散っていたが、花柄が長いこと、総花柄が無いこと、芽鱗が粘ることなどから、キリタチヤマザクラであることを確認した。

## 4 個体識別調査

秋本は、2000年と2001年に白岩山一帯に自生する個体の確認調査を行った。キリタチヤマザクラを見つけるには花の時期が一番良いため、開花期に一気に調査を行った。見つけた個体には番号をつけ、計測して木札をとりつけた(図2)。2年間に確認した個体は69本であった。



図1 自生地の位置

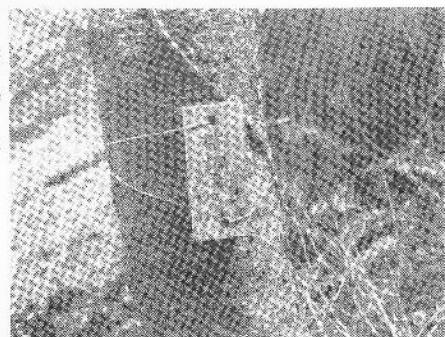


図2 調査個体につけた木札

分布の状況は、図3のとおりであった。個体数が一番多かったのは、石灰岩峰の西斜面である。ここは石灰岩のガレ場で、植生は貧弱で、サワグルミやシオジ、ミズキの高木がまばらに生え、亜高木層はほとんど発達せず、低木層や草本層も貧弱である。高木や亜高木の生えていないところもある。他の生育地も谷筋などの転石の多い所で、生育環境はよくない。

なお、2002年以降は個体識別調査は行っていないが、未記録の個体が多数見つかっており、総個体数は100本を超えると思われる。向坂山北側の熊本県側でも1本見つかっている。

一方、日之影町洞岳のものについては詳細な調査は行っていないが、現在、2本を確認している。1本は石灰岩峰下のガレ場で、もう一本は石灰岩峰から離れたところの道路沿いにある。

白岩山系の白生地の標高は、低い所でおよそ1300m(1200mに1本あり)、最も高い所で1630mである。洞岳のものは、1本はおよそ1160mで、もう1本は1100mの所にある。

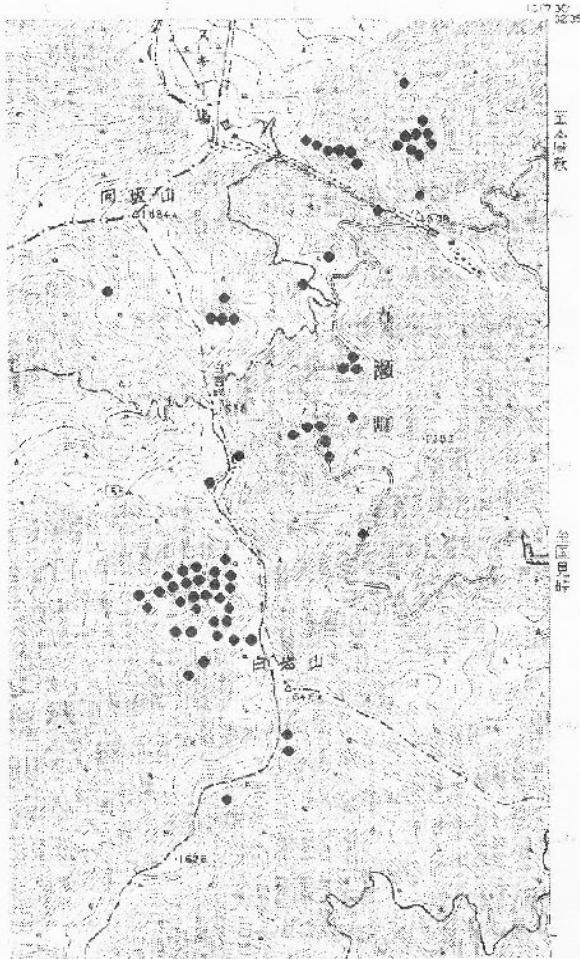


図3 白岩山系の分布状況

(国土地理院発行の2.5万分の1地形図「国見岳」を使用)

## 5 調査個体の計測値

### (1) 胸高直径

計測した49本のうち、最小のものが1.5cm、最大のものが47.5cm、平均16.7cmであった。これらをまとめたものが、図4である。これを見ると、5cm以上のものは、大きくなるにつれて木数が少なくなっている。逆J字型の分布をしているといえる。言い換えれば、後継木が順調に育っていることになる。5cm以下の木数が5本と少ないのは、開花できる年齢に達していないため、見つけだすことができなかったものと思われる。なお、35cm以上の6本は、すべて岩峰下のガレ場に生えていて、ここから種子

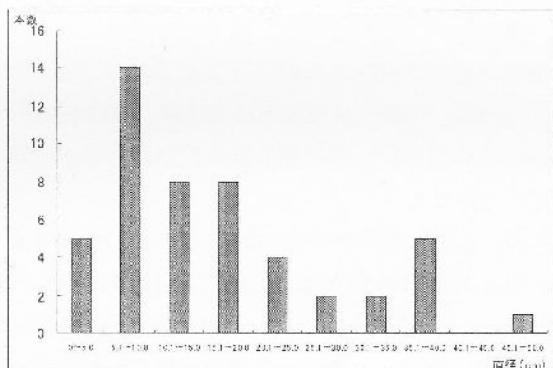


図4 胸高直径毎の本数

が鳥、もしくはテンなどの小動物によって周辺にばらまかれ、後継木が育っているものと思われる。

## (2) 樹高

樹高は長い竿に測量用のロープくくりつけて伸ばして計測したが、届かないものは一部目測とした。計測したのは68本、最小のものが3m、最大のものが18m、平均10.0mであった。胸高直径と樹高との相関関係を表したのが図5である。これを見ると、胸高直径が25cmくらいまでは、樹高は直線的に増加している。それ以上になると、ばらつきはあるが、横ばいのように見える。

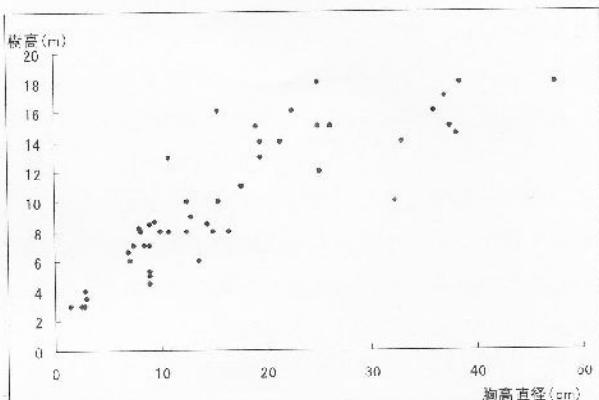


図5 胸高直径と樹高の相関

## 6 形態的特徴

## (1) 幹

樹皮は暗紫褐色で、表皮は小さくはがれ、ざらざらしている。大きな木では、皮目がよく現れ、横一列に規則的に並ぶ。新しいものは茶褐色でよく目立つ(図6)。全体的にはヤマザクラによく似ていて、樹皮だけで両者を区別することは難しい。



図6 幹の皮目の様子

## (2) 葉

葉は、開花後伸び始める。初めは明るい紫褐色をしているが、展開後は暗く濃い紫褐色となる。この葉色はヤマザクラには見られないものであり、遠くからでも割とたやすく識別できる。しかし、夏季になると、緑味を増し、ヤマザクラとの識別は困難になる。

芽鱗は広い楕円形で、よく粘る。また、縁には腺状の突起物が並ぶ。托葉は線形で、縁には腺状の突起物がまばらにつく(図7)。

葉柄の長さは2.5~3cmで、上部に蜜腺がある。葉身は長さ9~14cmで、12cm前後のものが多い。幅は4~8cmで、6~7cmのものが多い。形は倒卵状楕円形のものが一般的で、先は尾状に伸びる。

一方、白岩山系のヤマザクラは、葉柄の長さが1.8~2.2cm、平均2cm、葉身の長さは、9.5~12cm、平均10.6cm、幅は3.2~5cmで、平均4.3cmで、倒卵状長楕円形をしているものが多いが、変異も大きい。葉形の一例を示したのが図8であるが、キリタチヤマザクラは葉が大きく丸みが強いが、ヤマザクラはやや細く、葉先や基部もくさび形である。

鋸歯にも違いが見られる。共に一部が2重鋸歯となっているが、キリタチヤマザクラがよく立っている

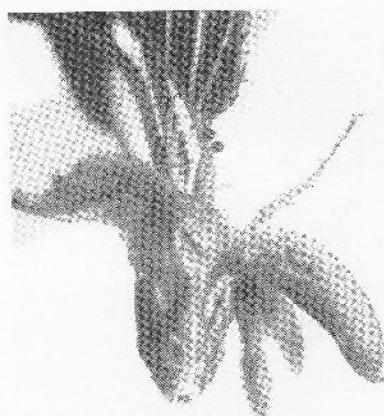


図7 新芽の芽鱗と托葉

のに対し、ヤマザクラは斜行氣味である（図9）。

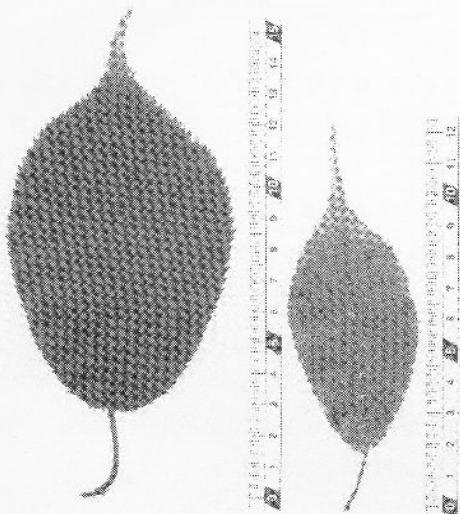


図8 キリタチヤマザクラ（左）とヤマザクラ（右）の葉の比較

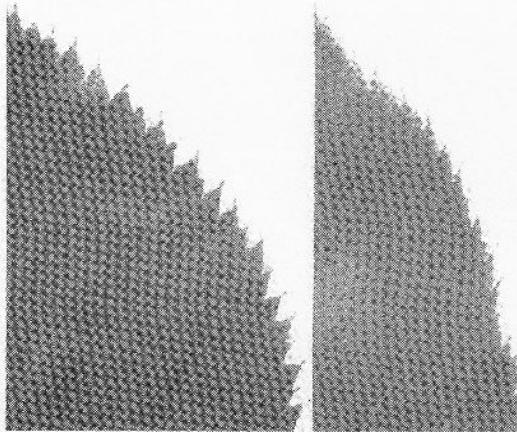


図9 キリタチヤマザクラ（左）とヤマザクラ（右）の鋸歯の比較

### (3) 花

#### ①ヤマザクラとの違い

県北には、キリタチヤマザクラ以外に、ヤマザクラ、ミヤマザクラ、エドヒガンが自生しているが、キリタチヤマザクラは、ヤマザクラに似るので、両者の違いを述べる。

ヤマザクラでは、花時に明らかに総花柄が見えるのに対し、キリタチヤマザクラでは全く見ることはできない。1花芽当たりの花数は2～3個である（図10）。

花の径も大きく、キリタチヤマザクラでは、3.5～3.9cmである。花弁は淡紅色で、最盛期には遠方からでも識別できる。秋本がこの花の存在に気づいたのもこの色のためであり、個体識別調査も花による識別が最もやりやすかったので開花期に行ったのである。花柄、萼筒、萼裂片も同じように赤味が強い。ちなみに、キリタチヤマザクラでは、萼筒長が7mm、萼裂片長が6mmであった。

#### ② オオヤマザクラとの違い

キリタチヤマザクラとオオヤマザクラの違いは、オオヤマザクラが近くにないので比較できなかったが、大場（2000）は、キリタチヤマザクラの特徴は、花柄が長さ3.5cmに達すること、萼筒が筒状で、萼裂片が針状三角形、銳頭になること、花弁の基部がくさび状になることなどとしている。

#### ③開花期

白岩山系における開花は、大体4月下旬から5月上旬にかけてである。標高の低い所から咲き始め、標高の最も高い向坂山では1週間程度遅れる。また、3月・4月の気温にも大きく左右され、開花日は年にによってかなりばらつきがある。この5年間の開花状況は概ね表1のとおりである。このデータから判断す



図10 キリタチヤマザクラの花序

る限り、2001年の値がほぼ標準的と思われる。

表1 過去5年間の開花日

	1300m	1600m
1999年	4月29日	5月2日
2000年	5月5日	5月10日
2001年	4月23日	4月27日
2002年	4月14日	4月22日
2003年	4月20日	4月25日

#### (4) 果実

##### ①大きさ

果実は受粉後、次第に生長して大きくなり、標高にもよるが、大体6月下旬に熟し、黒紫色になる。熟期のものの大きさは、幅が8~9mm、長さが10~11mmと、やや縦長である。

##### ②発芽試験

秋本は規制区域以外の所に生える個体から採取した種子の発芽試験を試みた。採取したのは2000年6月で、7月と9月に合わせて75粒を播種した。試験を行った場所は白岩山の山麓で、標高700mの所である。

発芽が始まったのは3月10日ごろで、3月末までに62粒が発芽した(図11)。発芽率は83%で極めて良い。7月播きと9月播きには差は見られなかった。現在、発芽後2年が経過し、大きいものは樹高が2.5mに達している。



図11 発芽の様子

#### 7 基準木について

holotypeが採集された個体は、白岩山系の向坂山の東南斜面にある。幹は楕円形で、短径が30cm、長径が36cm、幹周が107cmである。樹高はおよそ14mで、ひこばえが出ている。木の近くには基準木を記した標柱が立ててある(図12)。なお、宮崎県総合博物館にはisotype標本が収蔵してある。

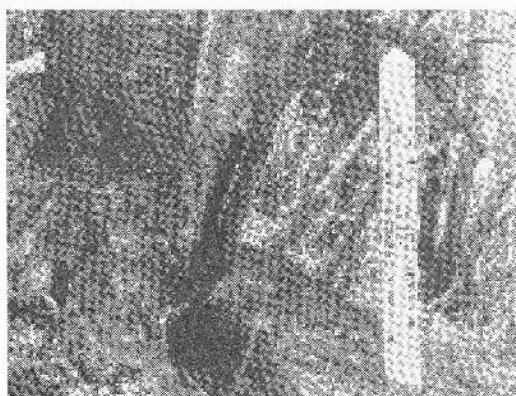


図12 基準木に立てられた標柱

#### 8 キリタチヤマザクラが宮崎県で発見された意義

オオヤマザクラは、主に中部地方から北海道にかけて分布する北方系のサクラである。しかし、中国地

方や四国にも点々と生えている。その場所はいずれも1000mを越える高地の山の斜面などで、宮崎県でも、おおよそ1200m以上の高地に生えている。

これらのことから、かつてオオヤマザクラは、氷河期に日本列島全域に分布したが、その後の温暖化で北上するとともに、標高の高い山岳地帯に生き残ったと思われる。オオヤマザクラの変種である宮崎県のキリタチヤマザクラはその後独自の進化をとげたものと推察される。残存植物は蛇紋岩や石灰岩のガレ場によく生えるとされているが、キリタチヤマザクラの自生地はまさにその環境にある。キリタチヤマザクラが自生する白岩山系と洞岳は石灰岩が露出していて、岩棚には、イワギク、キリンソウ、ウスユキソウ、ホタルサイコ、シコクシモツケソウ、ヤハズハハコなどの希少な植物が多い。これらの多くは、氷河時代の寒冷期に南下し、後氷期の温暖化に伴って高山帯に取り残された残存植物と言われている。洞岳には、チシマゼキショウの変種ミヤマゼキショウ（ナガエチャボゼキショウ）が生えているが、これも残存植物と思われる。キリタチヤマザクラの多い白岩岩峰下の自生地（図13）は、急斜面で、土壌は発達せず石灰岩の角礫で覆われている。そのため、林相は貧弱で、サワグルミやシオジ、ミズキ、ヒメシャラなどがまばらに生えている。この一帯は本来、ブナやミズナラ、シナノキなどの落葉広葉樹が優占する地域であるが、このような環境故にオオヤマザクラが生き残れたのである。日之影町の洞岳に生える1本も同じ環境の岩峰下のガレ場に生えている。

## 9 終わりに

キリタチヤマザクラの個体数は正確には把握していないが、少なくとも100本はあることが分かった。しかも、若い個体も多く、後継樹が確実に育っている。自生地の大半は国定公園の保護地域であったり国有林となっているため、許可無しの採集はできない。そのため絶滅の心配は今のところない。しかし、自生地の周辺はシカが多く、他の貴重な植物が食い荒らされ、絶滅の危機に瀕している。このことを考えると、キリタチヤマザクラの稚樹も被害を受けている可能性がある。今後、他の植物を含め、自生地全体を保護する対策が必要である。

キリタチヤマザ克拉は日之影町洞岳にも自生することを確認したが、個体数や分布の詳細はまだ分かっていない。本県を含めた九州内の分布の解明がこれからのが課題である。

## 謝辞

本稿の作成にあたり、キリタチヤマザ克拉の分類についてのご教示をいただいた東京大学総合研究博物館の大場秀章先生、本稿への助言をいただいた宮崎大学農学部の甲斐重貴先生、中国・四国地方の情報を提供いただいた倉敷市自然史博物館の狩山俊悟氏、山口県立山口博物館の嶋村拓実氏、徳島県立博物館の小川誠氏、洞岳の情報をいただいた日本山岳会宮崎支部長の大谷優氏、調査に協力をいただいた「霧立越の歴史と文化を考える会」の皆様にお礼申し上げる。



図13 白岩岩峰下の自生地